

人生には障碍が多い

人生の旅路は座敷で道中雙六をして、花の都に到着するが如き呑氣のものではない。眞實の旅行に於ては如何に旅行其のものを好むにしても、尙ほ且つ風雪の悩みがある。峻坂嶮路の苦みがある。或る時は磯路に阻まれ、又或る時は九折の山逕に白雲を分け、青苔に滑る等種々様々な艱苦を忍ばなければならぬ。即ち其處に明かに努力を要する。若し一路坦々として砥の如く而かも春風に面を吹かれ、良馬に跨つて旅行するならば、努力などはいやうなもの、全部の旅行が左様氣樂にばかり行かない。如何に財に富み、地位に於て高くとも、天の時地の状態等に因つて、相當の困苦艱難に遭遇するは旅行に於ては免れない所であつて、又人生の常である。故に如何に事業を好む力が旺盛で、之を爲す才能が卓絶して居つても、徹頭徹尾好適の感情を以て之を遂行するこ

周公

支那周の武王の弟、文王の子、武王の死後四ヶ年間攝政の位に即く。五經の一たる「禮記」及「易經」を完成すアレキサンダ

マセドニア王の子、四方に遠征しギリシヤ、エジプト、印度等を征服し、紀元前三三三年没。ニユートン英國の數學者で物理學者。引力の理を見す。一七二七年没。コペルニカスポーランドの星學者、天體循行論を大成す。一五四三年没。

天才は奮闘努力の堆積である

とは、殆んど人生の實際にはあり得ない。種々様々な障碍、蹉跎の伴ふことは己むを得ない事實である。而して之を押し切つて進むは、全く其の人の努力に俟つより他はない。周公、孔子の如き聖人、秀吉、ナポレオン、アレキサンダーの如き英雄、或はニユートン、コペルニカスの如き學者でも、皆努力に依つて其の事業に光彩を添へ、勉に依つて之を大成したのである。況して才乏しく、徳低き者に在りては、奮闘努力は成功に導く唯一の味方であると言ふも敢て過言ではないのである。

世に天才と言ふ言葉がある。此の言葉は動もすると奮闘努力に依らずして得たる知識才能を指すが如く解されて居るが、之は皮相の見解たるを免れない。所謂天才なるものは、其の系統上に於ける先人の奮闘努力の堆積が然らしめた結果と見るべきであ

る。社會學者タルドは「天才は積み上げられし最後の一片を積みたるに過ぎず」と言つて居る。夫の美しい斑紋を持ち又は稀有な畸形を爲した萬年青が生ずると、之を珍奇なるものとして非常なる價値を認むるが、然し此の萬年青を能く研究して見ると、それは決して偶然に生じたものではなく、其の系統の中に珍奇高貴となるべき所以の原因を持つて居つたことを發見する。草木にして然りである。況して人間に於て稀有な尊いものが、忽然として此の世に生れる理由はないのである。彼等を出すには、出すだけの過古の傳統もあり、時代の要求もあつたので、過古に於て名も知られない幾多の人々の成功や、失敗が大成せられて天才の發明となるのである。吾々は動もすれば奮闘努力せずして、或る事を爲さんとするが如き考を持つが、それは實に誤つた考である。奮闘努

奮闘努力の要素

力より他に吾々の未來を良くするものはなく、奮闘努力より他に吾々の過去を美しくしたものはない。奮闘努力は即ち生活の充實である。各人自己の發展である。生の意義である。

奮闘努力とは額に汗して其の目的を達成せんとする道である。拮据^{いそ}勉^{けん}勞^{らう}作^{さく}力行^{りき}することを謂ふのである。従つて奮闘的精神の中には、勇氣、堅忍、克己、大膽、正義、至誠等の要素を含んで居る。換言すれば健康勝れ、勇氣に富み、堅忍不拔であつて而も克己心の強い正義至誠の人でなければ、到底奮闘努力の生活に堪えることは出来ないのである。

健康

奮闘努力に必要な第一の要素は健康である。健康が勝れなければ心は如何に逸^はるとも、奮闘努力することは出来ない。始終病院に通ひ醫師の厄介になつて居つたのでは仕事は出来ない。

身體が羸弱ならば志を立て、道を行はんとするも、身心に伴はず、手・腦に従はず、徒らに心神を過勞するのみで其の功なきに終る。身體の健康は實に人生の本務を遂行するに於て第一の必要條件である。米國の詩人ロングフェローは「健康を伴はざる生活は重荷なり、されど健康を伴へる生活は愉快なり」と歌つて居る。人は貴賤貧富の別なく、男女老若を選ばず、何れも等しく幸福を望むものである。而して健康に優れる人生の幸福は、恐らく他にあるまい。吾々は金殿玉樓に起臥し、美衣、美食に飽き、夫の天國の樂園も斯くやあらんと思ふほど、榮華榮耀を極むるとも、若し身に病あらば何等の愉快も覺えることは出来ない。身體さへ健康體であつたならば、如何に佗しき柴の庵に朝夕を送るとも、人生を愉快に送ることが出来るのである。身體の健全は活動の要件であ

衛生

る。身體虛弱ならば修學、習業、立身、興家、忠臣愛國の誠意があつても、之を實行することは困難である。殊に多忙なる鐵道業務に従事する者は、常に身體が健全でなければ、到底完全に其の職務を果すことは出来ないのである。健康は決して自然に任すべきものでない。生來健康の人でも、攝生の不注意より圖らずも終に不健康の身となることがある。又生來不健康の人でも、攝生に注意した爲め健康の身となる者もあるのである。故に人は須く健康體たらんことを勉むると共に、又攝生上の注意が甚だ必要である。而して攝生法としては常に身體、衣服、住居等を清潔ならしめ、適度の運動を取り、節制を保ち、規則的に生活を送るに在る。

健康を保持する上に於て攝生と共に必要なは、意志の力を以

て外部の障碍に打ち克つことである。即ち身體を鍛練して粗食、飢渴を忍び、風雪、炎暑に堪える習慣を養ふことである。攝生は消極的の健康保持法にして、鍛練は積極的の健康保持法である。

攝生法として飲食、空氣その他日常百般の事に就て細心に注意することは固より必要であるが、之が爲め臆病になつてはならない。今日の社會萬般の状態は到底衛生一天張りでは活動できない。衛生上より言へば霜曉の寒風に吹かれるのは良くはなく、又深夜の冷露に身を曝らすのも宜しくはない。然し社會の事情、人界諸種の務は紛糾錯綜して居る爲め、社會に立ち人と交つて活動して行く以上は、不衛生を厭つて居つては到底仕事は出来ない。殊に鐵道の現業に従事する者は、時に依れば暴風、大降雪、迅雷、降雹を冒しても戸外に於て業務を遂行しなければならぬ。又時に

精神作用と健康増進

コツホ
獨逸の微生物學者
一九〇八年日本
に來遊した。

依れば粗食と冷水に甘んじなければならぬこともある。其の他惡疫流行の巷へも出入しなければならぬこともあらう。故に身體を鍛練して強健ならしむる必要があるのである。吾々が攝生して身體を愛するは敢て死を怖れる爲めではない。亦病を怖れる爲めでもない。常に健全なる身體と、健全なる精神を持ちたいからである。身體をして精神の命令を遵奉せしめ、それを遂行するに堪へしめたい爲めである。強健なる精神の活躍に支障なからしめんが爲めである。

精神作用も亦健康増進に與つて最も力があるものである。自分分は病氣に罹るものではないと信じて、常に活動して居る人は病に冒されることが尠ない。先年コツホが虎列刺の黴菌を發見したとき、有名な衛生大家ベルリン醫科大學の教授コーペンホエル

と其の助手とは之に反対し、虎列刺は微菌の作用でないと主張し、激論の末、終に兩人は其の反対説を證明する爲めに、眞性なる虎列刺菌を水と共に呑んだが、下痢もしなければ病氣にも罹らなかつたとのことである。

精神作用ほど神祕不可思議のものはない。激烈な虎列刺菌さへも精神作用に依つて冒されないことがある。之を以て見るも如何に精神の鞏固が健康増進に貢献するの多大なるかを知ることが出来るのである。

少しの活動も爲さずに其の日々を過すことは、到底堪へられない苦痛である。活動に次ぐに活動を以てする所に生活の喜びがあり、意義がある。然し絶えず張りつめた弓の弦は切れ易いと同じ道理で、休みなく働き続けると終には健康を害する様になる

休養

ものである。活動の裡には常に適當の休養がなければならぬ。適當なる休養も亦健康保持上缺くべからざる要件である。殊に鐵道の如き不斷の業務に従事する者は自ら倦怠を覚え、身神の疲勞甚しきが故に適當なる休養を爲すことは最も必要である。鐵道の従事員は各其の職掌に依り勤務が一定して居らない。運輸關係の現業員には二十四時間繼續して勤務する者もあれば、八時間交代のものもある。又乗務員の如きは種々様々であるが、平均八、九時間内外で、而も常に快活なる動作と明敏なる頭腦とを以て、列車の運轉及旅客、荷物の取扱に従事するものであるから、身神の勞苦は實に甚だしいのである。夫の恐るべき運轉上の事故は、快活明敏なる能力の減退した場合に發生することが頗る多い。故に休養すべきときには大に休養して身神を養ひ、出勤に際しては

心地好く其の職務に活動する様心懸けなければならぬ。國有鐵道職員服務規程第二十八條に於ても「職員ハ常ニ身神ノ休養ニ注意シ殊ニ徹夜其ノ他特殊ノ勤務ニ服スル者ニアリテハ非番日其ノ他ノ休養時間ヲ濫用セサル様努ムヘシ」と規定してある。然らば休養時間は如何に之を使用すべきか、如何にせば身神の過勞を醫すことを得るか、其の方法は一にして足らず、又人に依り自ら差異あるべきも、凡そ左の如きは最も適當なる方法と思はるるのである。

一、睡眠の充足

二、睡眠後に於ける適當の散歩又は運動

三、睡眠前の入浴

四、營養の補給

五、居所の清潔

六、高尚にして身神を慰め得べき讀書及娛樂

七、家庭の團樂

以上の外尚ほ多々あるべきも、要するに各自の注意と工風に俟つ外方法はない。之に反し休養時間の濫用即ち睡眠の障礙となるべき圍碁、將棋、飲酒過度、觀劇過度の喫煙、不倫なる遊興、過度の運動、家事上の事故に對する不安等は、身神の過勞となり、執務に際して倦怠を生じ、能率を減退し、終には病氣の基となり、延いて事故を來す素因ともなるものであるから、極力之を排除するに努むべきである。之は直接列車の運轉に従事する職員の特に注意を要することである。

勇氣がなければ奮闘努力することは出來ない。如何なる困難

に遭遇しても之を押し切つて進むと言ふ勇氣は、實に奮闘努力の最大要素である。勇氣は即ち誘惑に打ち克つ所の徳である。社會の文明未だ進まない當時は、勇氣は主として自己防衛の爲め或は戦争に用ゐられた。之が所謂武勇である。然し文明の世には眞の勇即ち精神的勇氣が必要である。又忍耐も勇氣と異なるものではない。即ち誘惑に對し進撃的態度を取つて反抗するは勇氣で、之に對し防禦的態度を取つて、それに屈しないのが忍耐である。人が事業を爲すに際して、其の事業が大なれば大なるほど種々な誘惑がある。外界より來る誘惑もあれば、自己の心裡より來る誘惑もある。此の心裡より來る誘惑に打ち克つには人格が必要である。而して人格も亦一層の勇氣である。若し此の種の所謂道德的勇氣、忍耐、人格等に缺如して居るときは、何事も其の目的を

鐵道職員と道德的勇氣

達することが出來ないのみならず、屢、正しい道を離れて邪よこしましき道に陥り易くなるのである。

鐵道に従事する者は、特に誘惑に打ち克つ勇氣を修養しなければならぬ。國有鐵道職員服務規程第十一條に「職員ハ所屬上長ノ許可ヲ得タル場合ノ外職務ニ關シ報酬其ノ他何等ノ名義ニ拘ラス贈遺響應其ノ他ノ利益ヲ受クルコトヲ得ス」第十二條には「職員ハ職務ニ關スルト否トヲ問ハス所屬職員ヨリ贈遺響應其ノ他ノ利益ヲ受クルコトヲ得ス」と明らかに規定してある。夫の厭いとはしき收賄事件、貨物採取事件、收入金流用、貨車配給其の他の不正事件等を惹起するのは、何れも此の規定を無視し且つ此の道德的勇氣の缺乏に基因するものである。

勇氣があつても一時的のものでは、到底目的を達成することは

根氣

出来ない。永續性のものでなければならぬ。即ち根氣があり、辛抱強いつ言ふことが必要である。一度失敗して忽ち勇氣を沮喪し、事業を途中で放棄するやうでは到底大事業を成し遂げることは出来ない。夫の銅山王と稱せられた古河市兵衛は實に辛抱強い人であつた。彼は自ら有望な銅山と信じたならば縱令其の結果が面白くなくとも決して途中で挫折すると言ふ様なことはなかつた。何んと言はれても動ぜずに根氣強く行つた。又部下に對しては『土を銅にする積りで遣れ』と嚴命し、飽くまでも辛抱し、飽くまで根氣強く遣らせた。斯くて固より失敗したこともあつたが、遂に銅山王の名を得るに至つたのである。

大に奮闘して大に發展せんと欲する者は、己れに克つの力がなければならぬ。而して己れに克つことも亦一種の勇氣である。

古河市兵衛
鐵業家、元京都
岡崎村の庄屋、
晩年所有の鐵山
六十九個所に及
び明治三十六年
歿。

克己

王陽明
陽明學を唱へた
支那明の時代の
哲學者。

王陽明は『山中の賊を敗るは易く、心中の賊を破るは難し』と言ひ、外來の敵に打ち勝つは容易であるが、己れに克つて情慾を制するの難きを説いて居る。實際己れに克つと言ふことは口では言ひ易いが、なか／＼六ヶ敷いことである。然し人の失敗する原因は種々あらんも、其の根本の主因は、己れに克つ力が弱く、意志の薄弱なるに因るものが多い。克己心に乏しい者は、到底社會に立つて困難と戦ひ、事業を成就することは出来ない。然らば己れに克つ心とは如何なるものであるかと言ふに、第一に自己の弱點を抑へて、天賦の本能を向上發展せしむることである。

克己心を修養するには種々の方法もあらうが、左に擧ぐるものは最も平易の方法である。

一、朝起の習慣を養ふこと。睡いとき又は寒いとき床を出るの

は苦しいと思つても、忍んで行つたならば終には苦しくなくなる。

二、自分の弱點を矯正すること。自分の弱點を洞察するは容易のことではないが、常に自分を觀察して其の弱點を識らなければならぬ。フランクリンは十二箇條の項目を掲げて、毎日自分の行爲が其の項目に違ひはしないかと反省したとのことである。

三、憎惡の念を矯正すること。平素注意して成るべく他人の長所美點を見るやう努むれば此の念を矯正することが出来る。四、憤怒の念を矯正すること。使ふ人、使はるゝ人其の他何人に限らず事を爲さうとするものは、濫りに立腹しては宜しくない。所謂短氣は損氣で、立腹した爲め折角出来得べき事も破

クロムウエル
英國の大政治家
一八五八年歿。
カルヴァイン教
佛國の宗教改革
家ジーン、カル
ヴァインの樹てた
基督教の一派。

正義至誠

るゝことが往々ある。

五、激烈なる感情を抑制すること。クロムウエルは感情の激烈なる人であつたが、自ら省みて斯く感情が烈しくては大事を爲す器でないと自覺し、カルヴァイン教を信じ其の宗教の力に依つて、非常に感じ易い性質を抑へ、之が爲め甚だ靜平な人となつたとのことである。

孔子は『非禮を視る勿れ、非禮なることを聽く勿れ、非禮なることを働く勿れ』と説いたが、之も亦克己修養の一方法である。奮闘には以上述ぶるが如く健康、勇氣、根氣、克己心が必要であるが、次に大切なことは正義と至誠である。正義至誠であれば如何なることでも之を敢行することが出来る。如何なる勇氣も之より生じて来る。此の正義至誠なくして奮闘するは、即ち所謂暴

虎憑河の勇である。吾々は事を爲すに當り正義の念を離れず、至誠の心を去らないやう注意しなければならぬ。

事しあらば火にも水にも入らばやと

思ふはやがて大和魂 (明治天皇御製)

武夫の上矢のかぶら一筋に

思ふ心は神ぞ知るらむ (菊池武時)

虎と見て石に立つ矢もあるものを

などか思ひの透らざるべき (作者不知)

うきことの尙ほ此の上に積れかし

限りある身の力ためさん (熊澤春山)

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し

(家康遺訓)

正を守りて怖るゝこと勿れ

(シェイクスピア)

死を面前に怖れずに見るを得ば、他に怖るべきものなし

(カーライル)

自ら反りみて縮からざれば、裼寛博と雖吾れ慄れん、自ら反り

みて縮ければ千萬人と雖吾れ往かん (孟子)

内に省みて疾しからざれば、夫れ何をか憂ひ何をか懼れん

(孔子)

一忍以て百勇を支ふべく、一靜以て百動を制すべし

(蘇老泉)

人を責むるの心を以て己れを責むれば、則ち道を盡す

(張子)

天才とは無限の困難に堪へ得るもの、謂なり

(カールライル)

汝才能あらば勤勉以て之を發達せしめよ。若し才能なくば
勤勉以て之を補ひ得べし。かへすぐも天才を恃むべから
ず

(ラスキーン)

人一度びして之を能くすれば、己れ之を百度びし、人十度びし
て之を能くすれば、己れ之を千度びす。果して此の道を能く
すれば、愚と雖も必ず明かに、柔と雖も必ず強し。

(中庸)

如何に弱き人と雖、其の全力を單一なる目的に集中すれば、必
ず其の事を成し得べし。之に反して如何に強き人と雖、多く

の目的に其の精力を分散すれば一事だに成すこと能はず。
点滴も絶えず墜つれば岩をも穿ち、怒吼岩上を越す急流は、却
つて其のあとに何等の點跡を留めず (カールライル)

第十四章 奮闘努力の修養

奮闘心の乏しい
人の缺點

世間には奮闘心に乏しい者が甚だ多い。立身出世を希ひ、商賣繁昌を祈りながら、其の根本の要素たる奮闘努力を顧みない者が決して尠なくない。一般に奮闘心の乏しい者は、能く人生行路難を訴へる。即ち僅かの不幸があつても、忽ち力を落して「世の中は残酷である、人生の行路は難い」と泣言を言ふ。人生は決して行路難ではない。何人でも努力さへすれば行路は滑めらかなるべき人生を、自ら難澁にして居るのである。行路難を歎じながら、之に打ち克たうともせず煩悶して居るのである。奮闘心は再起の勇を生ずる。挫折しても、失敗しても捲土重來するの力が出る。

數次の失敗にも決して屈せず失望しない。泰然として更に其の最善の力を發揮して目的に邁進し、何時しか人生の行路を滑らかにする。奮闘努力主義の人は、直に實行するから仕事は著々として片付いて行く。今日の仕事は今日之を成し遂げる。然るに奮闘心の乏しい者は、稍面倒なこと、困難なことは之を明日に延ばしたり、又手で行ふことを口で誤魔化さうとする。二宮尊徳翁は「貧乏の人は昨日の爲めに働き、富める人は明日の爲めに働く、其の差は一日である」と言はれたが、實に味ふべき言である。今日の事は今日之を行ひ、成るべく明日の事までも今日行ふ位に進むべきである。羅馬の皇帝で、而も哲人であつたマーカス、オーレリアスは「余は唯だ一回、此の世を通過すべし。此の故に如何なる善事にせよ、余が爲し得るならば、若は如何なる親切にせよ、余が施し得

るならば、余は延期することなく、又怠ることなく、今直に之を爲すべし。余は再び此の道を通過せざるべければなり」と言ふて居る。此の一日を等閑にせざるは、此の一世を等閑にせざる所以であり、此の一時間を無駄にせざるは、此の生涯を無駄にせざる所以である。

然らば如何にして奮闘努力すべきかと言ふに、先づ第一に必要なことは、仕事の豫定計畫を樹てることである。換言すれば仕事を規律正しくすることである。即ち明日爲すべき仕事は今日之を豫定し、明日になると共に直に活動することの出来るやうに準備することが必要である。之は單に明日の仕事のみに止まらない。總ての場合に於て必要である。遠い將來の計畫は時には變更を必要とすることもあらうが、大體の計畫さへ樹つて居れば、仕

豫め計畫を樹てよ

事の緩急順序等も自ら定まり、従つて勞力も、時間も最も有効に利用され、仕事は能率よく運ばれるのである。フランクリンは毎日の日課を作成して之を遂行したとのことである。實に豫定計畫を樹てるのは、適往すべき標的を定めると同様に必要である。

鐵道の業務の中に於ても、殊に現場の作業は、其の性質上、豫め計畫を樹てることが必要である。秩序なく場當の作業を爲して居つては、到底此の複雑なる業務の遂行は不可能である。構内作業の順序或は列車間合の執務割等を定むることの必要なるは、之が爲めである。

第二に必要なことは、其の日に豫定した計畫は必ず之を實行し、完結するに努むることである。如何に巧妙に豫定計畫が樹てられてあつても、實行が之に伴はなければ何等の効果もない。故に

計畫を實行せよ

爲すべく豫定された一定の仕事は、之を明日に延ばすことなく必ず其の日に遂行しなければならぬ。仕事の延期はつまり成功の延期である。若し仕事を延期して、二度とは得られぬ機会を失へば、遂には成功を見ることが出来ないのは當然である。千里の道を行くにも一里より始むるが如く、毎日一定の仕事怠らなければ、一箇月又は一箇年の計畫も亦之を實現することが出来るのである。要するに其の日其の日の仕事を完全に遂行すれば、如何に多忙の人であつても、仕事に追はるゝやうなことはなく、却つて仕事を追ふやうになる。世に奮闘家と稱せらるゝ者は總て實行家である。

精力を集注せよ

第三に必要なことは、仕事に精力を集注することである。即ち一事を爲すに際しては全精神、全能力を之に傾注し、一生懸命に働

いて又他を顧みるの邊のないやうにしなければならぬ。縦令終日仕事に従事するも、熱心を欠き全精力を傾注せず、好い加減に遣つて居るのでは其の効果は乏しい。之に反して其の時間は多少短くとも、一旦仕事に當つたならば何事をも忘れ、専心努力すれば其の効果は遙に多大である。古來奮闘家と稱せらるゝ人は、何れも一事に其の全力を傾注し、他に何事をも顧みなかつた人である。而して彼等が成功したのも實に之が爲めであつた。

第四に必要なことは小事を忽おぼろにしないと言ふことである。世人動もすれば小事を輕視する傾きがある。然し小事が積もつて大事となるので、最初より大事と稱すべきことは、それほど多く世に存するものではない。故に小事を忽にした者で、大事を成就した者は殆んどないと言つて好い。蓋し事を爲すに用意周到であ

小事を忽にするな

り、仕事に對して常に熱心があり、事業は即ち自己であると言ふ觀念を持つならば、如何なる小事にても苟も仕事に關係あることは、決して輕々に之を看過することは出来ないものである。故に小事に注意深い者は成功し、さうでない者は失敗する。

鐵道の作業に於て、一本の割りピンを粗末にし、或は一本の犬釘の打ち方が悪かつた爲めに、種々なる支障を起し、時には大なる事故となつて、貴重なる人命財産を失ふに至つた例も少なくない。單に事業の成否のみに限らず、些事を看過したが爲めに思はぬ失敗を招くこともあるのである。ナポレオンの將に戰鬪を開始せんとするや、士卒の携ふべき銃劍彈藥より、糧食の分量に至るまで、細かに調査したと言ふことである。用意の周到なる大に模倣すべきこと、思ふ。

成敗の原因

發明の端緒

ガリレオ
伊太利の學者、望遠鏡を發明して天體の觀察を爲し、種々なる發明を爲す。一六四二年歿。
ガルヴァニ
伊太利の有名な醫學者、ガルヴァニズム（流電氣）と稱する學說を創唱す。

前途に希望と信念とを懐け

又古今の大發明は何れも小事より研究の緒を開いたものである。振り時計の發明は、ガリレオが釣ランブの風に揺らるゝを見たのに始まり、電信機發明の端緒は、ガルヴァニの妻が蛙の足の痙攣を認めたのに基くのである。其他ニュートンが林檎の落つるを見て、引力の法則を考へつゝいたが如き、何れも之を證するものである。

吾々は常に前途に希望を懐き、奮闘努力すれば必ず成功すると言ふ信念を懐くことが必要である。希望のない者は目的のないと等しく、奮闘努力せんとするの念が生じない。唯だ其の日其の日を空しく過すのみである。仕事に精神が籠らないから、少しも効果が現はれない。前途に希望があつて之を達せんとすればこそ、初めて奮闘心も生ずれば、努力を必要とする心も生じて來るの

である。又自己の仕事に對し發展の見込がないとか、或は發展するか何うか分らないと言ふ疑心を懐くやうでは、到底奮闘力の念が生じない。故に吾々は是非とも自己の運命を開拓しなければならぬと言ふ確固たる信念を懐く必要がある。而して此の信念あつてこそ、如何なる困難の境遇に陥つても、希望の光に輝き總ての苦痛をも忘れ、愉快に仕事が出来るのである。

獅子兎を捉ふる尙ほ象を捉ふるが如くす、是れ象を捉ふる尙ほ兎を捉ふる如くなる所以なり。
(石 天 基)
多く事を爲すは易く、一事を永續するは難し

(ベンジョンソン)

大石道に横はるあらば懦者は見て行路の障碍とし、勇者は以

て進歩の階梯とせん。

(カリライル)

善き思想も之を行はざれば善き夢と異なる所なし

(エマアソン)

最善の時は現在なり

(同 人)

若し災害の來ることあらば、其の來る毎に豪然として高唱せよ、曰く此の災害たるや決して災害にあらず、能く之に堪ふるを得ば則ち幸運たらん

(マーカス・オーレリアス)

今日の後には今日なし

(西 諺)

業は日々新にすべし

(楠 正 成)

大丈夫爲さざれば則ち己む、爲せば則ち奮發銳進して以て大成を期すべきのみ

(二 宮 尊 徳)

偉人豪傑の士には一小些事と雖、之を輕忽に附し去るものな

し

(ナポレオン)

眞に大志ある者は克く小物を勤め眞に遠慮ある者は細事を
忽せにせず

(佐藤一齋言志録)

天下の大事は必ず細より作らる

(老子)

大事を爲さんと欲せば小事を怠らず勤むべし、小積りて大となればなり。凡そ小人の常大なる事を欲して小なる事を怠り、出来難き事を憂ひて出来易き事を勤めず、それ故遂に大なる事をなすこと能はず。譬へば百萬石の米と雖も粒の大なるにあらざ、萬町の田を耕すも其の業は一鋤づゝの功にあり、小なる事を勤めば大なる事必ずなるべし、小なる事を忽にする者大なる事は必ず出来ぬものなり

(二宮尊徳)

小事は小事である。然し小事に忠なるは大事である

(グレゴリー)

悪小なるを以て爲すこと勿れ、善小なるを以て爲さざること勿れ

(劉備)

第十五章 自尊心

自尊と自信

自尊とは自己の價値を認めて、自ら自分を重んずることである。自己の品位を認めて、之を損じないやう言行を慎むことである。支那では之を自重と謂つて「自ら侮るものは人之を侮る」と誠め、西洋でも「自己を尊重するものは、衆之を尊重せざるを得ず」と言つて居る程で、人の處世上に於ける自尊自重の緊要なるを説けるは、東西自ら其の揆を一にして居るのである。

自信とは自己を信ずることである。自分の力を信ずることである。自尊の徳を有する者は自信ある者である。故に自尊と自信とは自主獨立の本であつて、又吾々が社會に對して品位を保つ

世界は己れの鏡

所以である。

自尊心とは決して自惚れることでも亦空威張することでもない。自己を尊び重んずる結果、或は極端な個人主義や利己主義に走るであらうと氣遣はるかも知れないが、決して左様なことはない。蓋し世界は廣く且つ複雑であるが、自己の在る所には必ず世界が在る。世界は即ち自己の鏡で、人事は悉く自己を中心として起るものである。故に自己が弱く軽く暗ければ、亦國家、世界、人事悉く弱く軽く暗いものとなる。自己の存在が此の如く重大なる意義を有する以上は、之を尊び重んずるは當然のことである。又自尊心の強烈な國民は、それだけ自己の爲さなければならぬ義務を、完全に充分に盡すと言ふ觀念を持つて居るのである。

自尊心なき結果

自尊心のない者は自己の力を信賴して居らない爲め、何事も自

ら成し遂げやうと言ふ決心を抱くことが出来ない。加之他人の助力を仰ぐことは、自己の品位を損することの極はめて大なるものであることを悟らない爲め、萬事他人に依頼する心を生じ、遂には無能、卑屈の人となつて仕舞ふのである。人が獨立自營の民として世に活動することの出来ないのは、畢竟自尊、自信の心に乏しいことが其の主たる原因の一である。孟子は「舜何人ぞ、彼も人なり、吾れも人なり」と言ひ、ナポレオンは「不可能と言ふ文字は我が辭書に見當らず」と言つた。此の如く自ら信じ自ら尊んでこそ、初めて獨立獨行して、世に秀でた人と成ることが出来るのである。

自暴自棄

自尊、自信の反對の所謂自暴、自棄と言ふものがある。自己の價値を認めず、自己の尊び重んずべきことを知らずに、吾れと我が身

自己を尊重せよ

を亡ぼすのであつて、一種の自殺とも言ふべきものである。又自暴、自棄の結果、實際に自殺するものも決して尠なくないのである。人には貧富、貴賤の差別はあるが、其の人たる所以のものは一であつて、敢て其の間に差別を附けることは出来ない。更に考へて見れば、貧富と謂ひ、貴賤と謂ふも一定不變のものではなく、人の努力如何に依つて變化するものである。故に人は其の地位の高下職業の種類に依つて、人の眞價を測定することは出来ない。然るに世間に於ては、往々此等のものを以て、自己を卑下し、或は他人を輕侮するものがある。誤れりと謂ふべきである。人の眞の價値は其の人格である。徒らに自ら輕んぜず、常に自己の本分を重んじ、自己の眞價を信じ、自己の品性を高潔に保ち、人格の完成に努めなければならぬ。孟子の『夫れ人必ず自ら侮り、而して後人之

を侮る」と謂つた語は、吾々の處世の箴と爲すべきである。自身を信ずる自尊心の養成の爲めには、我等は自分の人柄を損じ、自尊心を傷けるやうなことに近づいてはならない。言行を慎み、誘惑を遠ざけるのは勿論、友人や書物の選擇も亦注意しなければならぬ。

人は總て人格を有して居る。地位財産は固より場合に依つては生命にも換へることの出来ないものは、此の人格である。實に至上至高の寶である。人が己れより地位の低いものに高ぶつたり、貧しきものを侮つたり、或は人を亂暴に使役するが如きは、甚だ不都合の所爲であつて、人格觀念のないものゝ行爲である。聖哲カントは「己れの意思の格率が纏て何人にも妥當なるが如く行動せよ」と教へて居る。蓋し金言である。

人格を尊重せよ

相互尊重

吾々は断じて他の人格を無視してはならない。何人に對しても必ず人を人として尊重し、身分地位財産等の低きを以て之を輕侮するやうなことがあつてはならない。夫の出札の窓口に於て、往々従事員と旅客との間に口論の生ずる如き、或は構内作業に於て驛庫、區等の従事員間に喧嘩の起るが如き、お互に他の人格を無視するからである。人は自分を尊重しなければならぬと同時に、亦他人をも尊重しなければならぬ。自己のみを尊重して他人を賤しむは、未だ能く自尊の眞義を知得しないものと謂ふべきである。眞に能く自己を尊重する所以を知る者は、亦能く人をも尊重するものであり、人を尊重すれば人も亦己れを尊重するものである。

卑屈に流れるな

世の中には往々遠慮深くすることを、一種の美德の如く心得濫

に自己を卑下して、自己の眞價を割り引きするものがあるが、そんな必要はない。蓋し世の中は、自ら自己を馬鹿にしてかゝれば、他人も亦馬鹿にして接する。又自ら自己を微力のものとしたならば、他人も亦そう信じてしまふものである。殊に身分地位財産學問等に於て劣る所があると一層自己を卑下し易い。然し此等の物質的要素は人を評價する標準にならぬことは、前に述べた通りである。吾々は常に孟子の「舜何人ぞ、彼も人なり、我も人なり」と云ふやうな意氣を持つて居らなければならぬ。同じく尊い人格を有して居ながら、無益な謙遜をする必要はない、かりそめにも卑屈に流れてはならない。昔の武士が「一合取つても武士は武士」と言つた其の精神や、英國人が一労働者であつても「我は英國の紳士なり」と言ふ此の意氣こそ、實に吾々の尊ぶべき人格

の表現である。

自尊心と自慢心とは混同され易いものである。自尊心は空威張^びではない。自分を尊重することである。自分の力を信ずることである。自慢は自分の眞價以上に見誤り、自分の力を實力以上に誤信するのである。自尊心あるものは他人を尊重するが、慢心あるものは、他人を侮辱し、他人の人格を無視する。慢心は自己を尊重する所以に非ずして、却つて自己の人格を傷つけ、自己の眞價を下落さすものである。大に注意しなければならぬ。

第十六章 衛生

衛生に注意せよ

「健全なる精神は健全なる身體に宿る」とは古人の言である。實に健全な身體は吾々唯一の資本である。若し身體が虛弱ならば、折角學修め、徳を養ひ、業を勵みても、其の効果は少なく、總ての事が挫折するに至るのである。故に社會に起つて活動せんとする者は、須く衛生に注意しなければならぬ。身體の健全なる發育を圖り、且つ益之を強壯ならしむるは、實に人生の第一要件である。古人は所謂三養生の説なるものを説いて、第一は心の養生、第二は身の養生、第三は身代の養生と言つて居る。此の説に依れば、身代が悪くなれば心が悪くなり、心が悪くなれば身體が悪くなる。

三養生の説

此の三者は互に原因となり結果となりて、恰も一の環の如く循環するものであるとの意である。生計の獨立は所謂身代の獨立であつて、此の身代の獨立を圖らうとするには、身體の獨立と言ふことを考へなければならぬ。而して身體の獨立とは、即ち己れの身體をして他の人の厄介とならしめないやうにすることである。病氣に罹つて醫師の厄介になるが如きは、既に獨立でないことは言ふまでもなく、其の間に自己の活動即ち生産が杜絶して居るのであるから、其の生活は他の人の厄介になるものである。故に眞に獨立の生活を營まうとするには、衛生を重んじて身體を健康にすると言ふことを忘れてはならない。

何れ人間は死ぬる身體と定まつて居つても、生きて居る間は社會の爲め、人の爲めに働かなければならないのが、人としての義務

衛生の必要

である。『磯までは海人も簀著る時雨かな』と言ふ句がある。海人は海中に飛び込むのが職業で濡れるのは當然あるから、雨が降つても別に簀を着て行くには及ばないのであるが、それでも尙ほ途中磯までは簀を着て行くのである。吾々も何れは死の大海に没すべき運命にあるが、生きて居る間は衛生を重んじ、身體を強壯にしなければならぬ。殊に吾々は知らず／＼の間に社會より幾多の恩恵を受けて居るのであるから、生きて居る間は、之に報ゆる所がなくてはならない。即ち社會の爲め、人の爲めに働かなければならない。曾つて盤珪禪師は『君子一日生きたれば、一日世に利あり』と言つて身體を重んじたと言ふことである。吾々は又此の考を忘れてはならない。

節制

衛生の途は種々あるが節制を守るを以て第一とする。節制と

は物事に極まりを附けて放縱に流れないと言ふことである。即ち飲食を慎み、運動、休息、睡眠を適度にすることである。青年時代は心身の發育が盛んであるから、兎角血氣に逸り、何事に就ても過度に陥り易い。殊に飲食、運動に就てさうである。藥品も分量を過すと、却つて身體に害となると同様に、生きて行くに缺くことの出来ない飲食物も、不節制に攝取すると胃腸を害し、終にはそれが痼疾の原因となるのである。故に飲食に就ても常規を逸しないやうに注意することが肝要である。

缺勤は吾々の執務上、出来る丈け之を避けねばならない。缺勤の原因は種々あるも飲食物、運動、其の他の不節制に依るものも中々多い。曾てある青年が、徳富蘇峰氏に、如何にせば立身出世することが出来るかと質問した時、蘇峰氏は、當になる人間になれと教

深りに缺勤する

へた。而して當になる人間になる一要件として缺勤せぬことを教へて居る。實に缺勤は他の同僚に迷惑を及ぼすのみならず、自己の勤怠成績にも影響し、缺勤多き爲めに上長の信用を失ひ、其の結果向上發展の途を塞ぐに至るのである。鐵道部内に於て、毎日平均二パーセント乃至三パーセントの缺勤者がある。之が爲めそれ丈の定員を減じたと同じ結果になり、他の者が忙しく仕事をして居る譯である。而して缺勤は青年に多く、又獨身者に多いやうであるから、此等の人は特に注意すべきである。

次に飲酒に就ては古人も屢、其の節制を説いて居る。貝原益軒の養生訓にも「酒は天の美祿なり、少し飲めば陽氣を助け、陽氣をやはらげ、食氣をめぐらし、愁うれを去り、興きを發して甚だ人に益あり、多く飲めば、又よく人を害する事、酒に過ぎたるものなし、邵堯夫の詩

貝原益軒の飲酒の誠

鐵道職員と飲酒

に「美酒飲教微醉後」といへるは、酒を飲むの妙を得たりと、時珍いへり、少し飲み、少し酔へるは、酒の禍なく、酒中の趣を得て樂み多し、人の病、酒によりて得るもの多し、酒をおほく飲んで、天の美祿を以て、却つて身をほろぼすなり、かなしむべし」とある。飲酒が身體に及ぼす害毒に就ては、今更ら説明の要はないが、特に交通業務に従事する鐵道職員は、飲酒の節制に就て充分注意すべきである。勤務時間中に飲酒を爲し、或は飲酒の爲めに休養時間を消費し、身心の倦怠を來し、遂に重大な事故を惹起した例も決して尠なくない。吾々は能く前者の失敗を考察し、事故の撲滅を期すると同時に、自己の信用を失墜しないやう注意しなければならぬ。

節制に次いで衛生上必要なるは、身體、衣服、居室の清潔と言ふことである。身體、衣服の不潔は稍もすれば人の人品にも影響し、身

清潔

體、衣服などの不潔は又衛生上實に危険である。清潔は健康を保持し、精神を快活ならしむるに反し、不潔は病毒の伏在する所となつて、往々傳染病の媒介となることがある。身體の不潔は種々の疾病を生ずる原因となる。夫の毎朝冷水浴又は冷水摩擦を行ふ如きは、身體を清潔にするのみではなく、皮膚の抵抗力を増し、精神も亦従つて爽快になるもので、一舉兩得である。

茲に注意すべきは清潔と華美との差別を能く辨へることである。身分不相應の美服を纏ふて、濫りに風采を衒ふは、清潔ではなく華美である。偽善を行ひ虚名を求め、其の過を飾るが如き、精神的不純と共に賤むべきことである。

身體、衣服等の垢を去り、居室を清らかにすると共に心の垢をも除去しなければならぬ。精神の清潔とは心を常に公明正大に

持つことで、即ち邪念を去り悪意を拂ふことである。而して身體を清潔ならしむることは、總て精神の清潔を保つこと、密接な關係を有するものであるから、身體の清きを希ふは、又精神の清きを求むる一方法であることを知らなければならぬ。斯くして吾は心身兩方面の清潔に注意し、快活な氣分を以て眞に生き甲斐のある生活を營むやうに心懸けなければならぬ。居室の掃除は毎日、之を施行して居つても、尙ほ一年に一、二回の大掃除を必要とする。心の掃除も亦同様である。然るに兎角吾々は心の掃除を怠り勝ちであるのを残念に思ふ。次の如き歌がある。

手や足の汚れは常に洗へども

心の垢を洗ふ人なし

と、吾々は單に、身體衣服を清潔にするのみに留まらず、少くとも毎

朝一回位は、心の掃除に心懸け、精神方面の修養に志さなければならぬ。夫の現場に於て施行する朝の點呼の如き、之を利用せば、心の掃除には最も都合好き時と思ふ。

社會と衛生

吾々は多くの人々と共同生活を營んで居るのであるから、自分の健康は直に家族、社會に影響するものなることを忘れてはならない。萬一自分の不注意より傳染病などに罹つたならば、我が身の不幸は固より、家族、隣人の迷惑は一通りでない。斯く考へるならば、衛生は單に自分に對するのみではなく、廣く一般の社會に對しての緊要なる務となるのである。

清潔を愛するは國民の特性

古來清潔を愛するは我が國民の美風である。我が國民の如く好んで入浴を爲すものは、蓋し他に其の類を見ない所である。然るに公共的精神の缺乏の爲めか、廊下に唾したり、便所内に紙又は

煙草の吸ひ殻を捨て、或は濫りに放尿したりする。又従事員の詰所の如きも一般に不潔な處が多い。更らに傳染病に關する取扱ひの如きは不注意のもの多く、家族、隣人、社會に大なる迷惑を及ぼすことに就て一向無關心のやうに見へる。吾々は個人としての潔癖を公共的方面にも及ぼすやう心懸けなければならぬ。我が國民の全身浴は遠く神代より始まつたのである。伊弉諾命は夜見の國に行きて穢を見給ひ、之を清めんが爲めに、みそぎを爲し給ふた。又上代の人は身體を清潔にすれば、精神も亦従つて清淨になるものと考へたもの、如くである。大祓は人々が、知らず識らずの間に犯した穢と罪とを拂はんが爲めに行ふ所の一の式である。斯く精神及身體を清潔にするは、我が國民の特性である。廉潔と謂ひ、純潔と謂ひ、高潔と謂ひ、又潔白と謂ふは、何れも精神の

清潔を表はす言葉である。實に我が國民の心身の清潔を尙ぶは、衛生上にも修養上にも多大の効果ある美風であつて、國民の永く之を保存し、益之が發揮に努むべき所である。

鐵道の職員は日常旅客公衆に接する機會が甚だ多く、又其の職務は他に比し甚だ繁劇なるが爲め、各自體育上に注意して常に健康の保持に努めなければならぬ。國有鐵道職員服務規程第二十七條に於ても、職員は自他の衛生に關し特に注意し、(一)執務場所其の他の關係箇所を清潔にし、(二)流行若は傳染性疾患に對する豫防消毒並早期療養に努むることを命じて居る。不健康の多くは衛生思想の缺乏より生ずるものであり、衛生思想の缺乏は文明國人として最も耻づべきことである。吾々は職責上他に範を示すの覺悟を持たなければならぬ。(傳染病豫防規程及消毒規程参照)

鐵道職員と衛生思想

つねに身の養ひ草をつみてこそ

人のよはひは延ぶべかりけれ (明治天皇御製)

學問は心の汚を清め、身の行を良くするを本とす。

(中 江 藤 樹)

人間は身體の強壯が第一なり。勇猛なる精神と強盛なる根氣とは、天下の事業を爲す上に、缺くべからざることなり。身體虛弱なれば、此の精神と根氣とを失ふ。勇猛なる精神、強盛なる根氣は、健全なる身體と相伴ふものなり。昔の武士は弓、馬、鎗、劍、柔術などにて、身體を鍛鍊したるが故に強壯なり。

(勝 海 舟)

好んで酒を飲むべからず、饗應により固辭しがたくとも、微醺にして止むべし。

(松 尾 芭 蕉)

飲食は須く飢渴に充つべし、節を過ごすべからず、及び不時に
飲食すべからず。

(室鳩巢)

海よりも盃の中に溺れるものが多い。

(西諺)

酒が来れば智慧が去る。

(同上)

第十七章 自治の精神

自治の意義

自治とは吾れ自ら吾れを恃み、吾れ自ら我が事を做すと云ふことである。即ち自分の事は總て自分で始末し、人の世話にならぬことである。人に依頼せぬことである。仕事の方面から観れば、自ら進んで行ふことである。人に自分の仕事をさせぬことである。而して斯くの如き人を稱して自治の人と謂ふのである。自治的團體と言ふものがある。之は自治的人間の集まつたものである。自治し得る人物は立派な人格者であり、斯くの如き立派な人格者が多數集つて出来た團體にして、又自治を爲し得れば、其の團體も亦立派なる人格を備へて居るのである。

從來我が國民は一般に自治的精神が缺けて居つた。殊に團體としての自治心の教養は殆んどなかつたのである。之は封建制度の下に在つて、久しく個人の獨立心を押さへられて居つた爲めである。其の當時の政治は、民をして倚らしむべし、知らしむべからずと言ふ方針であつた。従つて國民は萬事政府に依頼して居つたのである。國家なるものは、國民が支へるべきものでなく、國民は國家に倚り纏るものと考へて居つたのである。斯くの如き國情で獨立心の生ずる筈はない。自治的人物の輩出も亦當然不可能であつたのである。然し明治二十一年四月に市町村制が發布されてより以來、漸次自治的觀念が養成せられ、自治の訓練が盛になつて來たのであるが、吾々は尙ほ進んで自ら覺醒し、自治の精神を強めるやう心懸けなければならぬ。

我が國有鐵道従事員の言行を觀察するに、遺憾ながら又國民共通の缺陷を其處に認めるのである。従事員の大部分は、其の年輩に於て、其の知識に於て、又収入に於て何れも立派な獨立した一人前の人である。従つて皆充分自活し得る素養を有して居るのである。然るに尙ほ此の缺陷あるは何故であるか。個人／＼が自治的觀念の薄きにも因るが、一般に鐵道に永住の心がない爲めではあるまいか。即ち一時的鐵道に奉職し、他により良き職があつたならば、何の惜し氣もなく轉職して行く考へがありはしないか。斯かる氣分で鐵道に居れば、決して鐵道を愛する氣風も起らない。又自己の職務を完全に遂行する考へも出ぬ譯である。従つて浮き腰である。眞劍になれない。怠業氣分、依頼心の生ずるのも無理からぬことである。吾々は一旦鐵道に奉職した以上は、飽まで

社會人としての義務を盡せ

此處で一生を終る考へを持ち、且つ相團結して自治的修養を爲し得る機關を造り、寸暇を惜んで智徳の修養に努め、個人としても亦團體としても、立派な自治を以て進むやうにしなければならぬ。吾々は社會の一員として其の恩恵に浴して居るのである。故に自己の爲し得る範圍に於て此の恩恵に酬ひねばならない。又鐵道従事員として鐵道の恩恵に浴して居る。故に職務に忠實にして鐵道の恩恵に酬ひねばならないのである。現在の社會に對して此の義務があるのみならず、現在の社會を先輩より繼承し、更に之を精鍊し、繼て來るべき未來の子孫國民に傳ふるの大責任を持つて居るのである。吾々は常に此の義務と此の大責任とを自覺して、職務に精勵し、社會に奉仕する考へがなければならぬのである。

—(終り)—

昭和二年六月二十日印刷
昭和二年七月五日發行

〔非賣品〕

(希望の方には實費八十錢にて頒つ)

著	所
作	有
權	
製	發
版	禁

發行兼
版權所有
印刷者
東京市京橋區岡崎町二丁目三七番地
築館武

印刷所
東京市京橋區岡崎町二丁目三七番地
東洋書籍出版協會印刷所

發行所

鐵道專門
書籍出版
東京市京橋區岡崎町二丁目三七番地
東洋書籍出版協會

電話京橋一三九二五七番
振替口座東京二六五七九番

終

